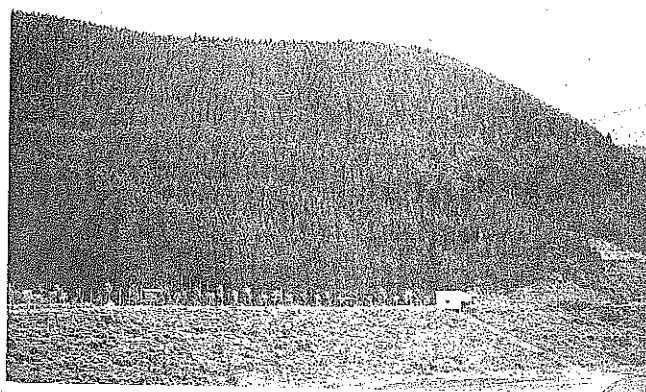


トオクオクノビヨ

日南市の飢肥^{おび}地方の山々には、空におか
つてまっすぐにのびている大きな木が、び
っしりと生えています。この木は「飢肥杉^{おびすぎ}」
といわれ、昔から人々のくらしをささえて
きました。飢肥杉は、ほかの杉に比べて水
に強く、ねばりがあるため、船や橋をつく
るのに使われてきました。



今から、二百年ほど前、この地方の人々のくらしは、あまり豊かではありませんでした。日照り続きで食べ物ができなかつたり、山ばかりなのでお米ができなかつたりしたためです。そこで、人々はこの山にくらしに役立つ木を植えることを考え

ました。しかし、ただ木を植えれば育つというものではありません。そこで、どのさまは、一生けんめいに仕事をする野中金右衛門を「植木方役人」にしました。

金右衛門は、毎日のように山々を歩き回り、この土地にびったりとあい、早く大きく育つ木をさがし続けました。

その日もさがし回っていました。夕方になりかけたので、もう帰ろうかと考えていたとき、ふと、道のはしの杉のなえ木が目にとまったのです。よく見ると、みきがまっすぐで、えだもりっぱに育っています。葉の色も青々としており、このなえ木なら、すばらしい木になることは、まちがいありません。

金右衛門は大よろこびしました。そして、さっそくそのなえ木をもとにして、たくさん
さんのなえ木を育て始めました。なえ木が育つと、みんなといっしょになって、
「りっぱな杉の木に育てるぞ。」

と何日も何日も山小屋にとまって、植え続けたのです。

大きな杉の木に育つためには、たくさん
さんの仕事がありました。杉のなえが、まだ

小さいときには、下草をかりとらなくてはなりません。夏の暑い日に大きな草かりがまを使う仕事は、大変なことです。あせが、体じゅうからふき出してきます。あせは、目や口にも入って苦しくなってきました。また、蚊かや毒どくへびなどにも気をつけなくてはなりません。

杉の木が大きくなると、まっすぐのびるようにえだ打ちをしなくてはなりません。えだ打ちは、木に登るのでとてもきけんな仕事です。

冬になると、寒くなって手が思うように動かなくなります。一日中仕事が続くと、体が冷え切って、うでやこしがいたくてたまらなくなることもありました。

しかし、金右衛門は、雨の日も風の日も一日も休まず、山に登って杉の木



の世話を続けたのです。その仕事ぶりは、まるで自分の子どもを育てるように熱心だったということです。

五十年後、杉の木は見上げるように大きくなりました。やさしい目で杉の木を見上げる金右衛門の頭には、いつしか白いものが目立つようになりました。

金右衛門は、五十年間も藩はんのために一生けんめい働き、一万本以上の造林地を二十四か所もつくりました。

金右衛門がやりとげた仕事は、当時の人々のくらしを豊かにしたばかりではなく、飢肥杉は、秋田杉、吉野杉とともに日本の三名杉さんめいすぎの一つに数えられるようになり、現在の人々の生活にも大変役立っているのです。

